

ダニエルの書 - 第百九十七番

預言的展開：キリストの第二の集結と黙示録の物語におけるイスラム教の終末論的役割

Jeff Pippenger

2024-04-29

私たちは今、「七つの雷」によって表されている出来事の一つが、キリストが御自分の民を二度目に集める働きであり、キリストがそれを2023年7月に始められたと特定している。ミラー派の歴史は、この働きが、メッセージの背景にイスラムの戦いを伴って成し遂げられることを示している。

そのメッセージとはイエス・キリストの黙示であり、恩恵期間が閉じられる直前に封印が解かれる。しかしそのメッセージは、第三の災いのメッセージによって伝えられ（その文脈に置かれて）いる。1849年、主が再び御手を伸ばしておられたまさにその時、ホワイト夫人は、イスラムの象徴である怒れる諸国民の動揺について言及していた。

1848年12月16日、主は、天の力が揺り動かされる光景を私に見せてくださった。私は、主がマタイ、マルコ、ルカに記されたしるしについて語られる際、「天」と言われたときは天を、「地」と言われたときは地を意味しておられるのを見た。天の力とは太陽、月、星である。それらは天にあって支配している。地の力とは、地上で支配している者たちである。神の御声が響くとき、天の力は揺り動かされる。そのとき、太陽と月と星はその位置から動かされる。それらは消え去ることはないが、神の御声によって揺り動かされる。

「暗く重い雲が湧き上がり、互いにぶつかり合った。大気は裂けて後ろへ押しやられ、私たちはオリオン座にある開いた空間を通して見上げることができた。そこから神の御声が響いてきた。聖なる都はその開いた空間を通過して下って来る。私は、地上の諸権力が今揺り動かされており、出来事が順序正しく起こっているのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、飢饉、そして疫病が、まず地上の権力を揺り動かす。その後、神の声が太陽、月、星、そしてこの地球も揺り動かす。私は、ヨーロッパにおける諸権力の揺れ動きは、ある者たちが教えるような天の諸力の揺れ動きではなく、怒れる諸国民の揺れ動きであるのを見た。『初期の著作』41。」

歴史家たちは、1848年にヨーロッパの諸国を揺り動かしていたのがイスラムの軍勢の活動であったことを確認している。というのも、預言的には彼らは諸国民を怒らせる力として象徴されているからである。1840年から1844年の歴史における、主がふたたび御手を伸ばされることの最初の証しとして、「真夜中の叫び」のメッセージがエクセターのキャンプミーティングに到来した。そこから1844年10月22日まで、そのメッセージは津波のように合衆国の東海岸を席卷した。その運動はキリストのエルサレムへの凱旋入城によって予表されており、キリストをエルサレムへ運んだのは一頭のろばであった。

真夜中の叫びのメッセージは、『イエス・キリストの黙示』における預言的メッセージ全体を表している。しかし、その黙示は、第三の災いとしてのイスラムが諸国民を怒らせ

るといふ文脈の中に置かれている。というの、イエス・キリストの黙示というメッセージを担っているのはイスラムだからである。イエスはユダの部族の獅子であり、「ろば」のメッセージに結び付けられている。

ユダよ、あなたは兄弟たちにたたえられる者である。あなたの手は敵の首にあり、あなたの父の子らはあなたの前にひれ伏す。ユダは若獅子である。獲物から、わが子よ、おまえは上ってきた。彼は身をかがめ、獅子のように、老いた獅子のようにうづくまる。誰が彼を起こしえようか。王杖はユダから離れず、彼の足の間から立法者が絶えることもない。シロが来るまで。そして諸民は彼に集う。彼は自分の子ろばをぶどうの木に、ろばの子を良いぶどうの木に繋ぎ、その衣をぶどう酒で、その衣服をぶどうの血で洗う。その目はぶどう酒で赤く、その歯は乳で白い。創世記 49:8-12。

「民の集い」はユダを通して実現する。ユダであるキリストはまた「ぶどうの木」であり、そして「良いぶどうの木」は「ろばの子」に結ばれている。彼の「衣服」は「ぶどう酒」で洗われた。それは「ぶどうの血」であった。キリストは、血の汗を流されたゲツセマネで血を流し始めた。ゲツセマネは「オリーブの搾り場」を意味する。ゲツセマネから十字架に至るまで、彼はすべての人をご自身のもとに集めるために尊い血を流された。

今やこの世の裁きが下される。今やこの世の君は追い出されるであろう。わたしは、地上から上げられるなら、すべての人をわたしのもとに引き寄せるであろう。彼は、自分がどのような死に方をすることになるかを示して、こう言った。ヨハネによる福音書 12:31-33

すべての人をご自身のもとに引き寄せるキリストの御業は二段階の過程であり、まず「イスラエルの追いやられた者たち」を集め、次いで彼らを旗印として用いて、ご自身のほかの羊の群れを引き寄せる。

わたしは良い羊飼いであり、わたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。父がわたしを知っておられるように、わたしも父を知っている。そして、わたしは羊のためにいのちを捨てる。また、わたしにはこの囲いに属さないほかの羊もいる。彼らも連れて来なければならない。彼らはわたしの声を聞き、一つの群れ、一人の羊飼いとなる。ヨハネ 10:14-16。

十四万四千は、彼を知っている「羊」である。「ほかの羊」は、旗印を見聞きするときにバビロンから出てくる、彼の群れである。彼はご自分の旗印である彼の羊を掲げる前に、まず彼らを二度目に集める。その聖史の筋は、ダニエル書十一章十三節から十五節に一致しており、ゆえに四十節の隠された歴史とも一致している。それは、四十一節の日曜法の直前に、背教したプロテスタントの角、背教した共和主義の角、そしてツロの淫婦の到来という歴史のただ中で進行する、真のプロテスタントの角の筋を表している。真のプロテスタントの角の筋は、十四万四千が印を受けるその歴史とメッセージの双方を表している。

「イスラエルの逐われた者たち」は、エレミヤが「あざける者の集会」と呼び、またヨハネが黙示録2章と3章でスミルナとフィラデルフィアの教会に宛てて「サタンの会堂」と呼ぶ者たちとは対照的な立場を示す。フィラデルフィアの人々は黙示録7章の「十四万四千人」を表し、スミルナは同章の「数えきれない大群衆」を指す。終わりの日の贖われ

た二つの階級は、偽りを語り、「サタンの会堂」に属し、自分たちはユダヤ人だと称して神の民であると主張する者たちと論争関係にある。

真のプロテスタントの角の系譜は、真のプロテスタント側と、その時見過ごされつつあるかつての契約の民との間に存在する論争から成り立っている。同じ歴史の中で、忠実な者たちは背教的プロテスタンティズムおよびカトリックの系譜とも論争している。これら三つの宗教勢力は、真のプロテスタントの角の系譜の内部において、ミクロレベルで竜、獣、偽預言者を表している。

「私は、名ばかりの教会と名ばかりのアドベンチストが、ユダのように、真理に対抗するためにカトリックの影響力を得ようとして、私たちをカトリックに売り渡すのを見た。そのとき聖徒たちは目立たない民であり、カトリックにはほとんど知られていないだろう。しかし、私たちの信仰と慣習を知っている諸教会と名ばかりのアドベンチストは（彼らは安息日のゆえに私たちを憎んでいた。彼らにはそれを反駁できなかったからである）、聖徒たちを裏切り、民の制度をないがしろにする者だとしてカトリックに報告する。すなわち、彼らは安息日を守り、日曜日をないがしろにしているのだと。」スバルディングとマガン、1、2。

私たちは以前にもこの箇所を扱っており、その際「名目上の教会」と「名目上のアドベンチスト」という表現は、ホワイト夫人がそれらの言葉を書き記した当時には意味や適用が異なっていたであろうことを見出した。とはいえ、預言者たちは自分たちの時代の歴史よりも終わりの時代のために多く語っているので、この箇所における終わりの時代の「名目上の教会」は背教的プロテスタントを指すことになる。「nominal」という語は「名ばかりの」を意味する。

いわゆるプロテスタント教会は、1844年に、信仰によって至聖所に入ることに反対したとき、ローマに対する抗議をやめた。そこでは、第七日安息日こそが正しい礼拝の日であることを認めることができたはずであった。その代わりに、彼らはカトリックのしるしである太陽崇拝を保ち続けた。「プロテスタント」という語の唯一の定義である「ローマに抗議すること」は、もしその権威のしるしを受け入れているなら、不可能である。その権威のしるしとは、聖書における礼拝の日を第七日安息日から日曜日へと変更する権威にほかならないと、ローマ教会が繰り返し自認してきたものである。

「名目上のアドベンチスト」とは、自らセブンスデー・アドベンチストであると公言する者たちのことであるが、同時に、自らの公言を裏切った弟子の象徴であるユダとしても見なされる。名目上のセブンスデー・アドベンチスト教会は「聖徒たち」を憎み、その聖徒たちはやがて「目立たない民」と「なる」。彼らは「安息日」のために、すなわち彼らが「反駁」できない真理のゆえに、その目立たない聖徒たちを憎む。ホワイト姉妹の歴史における安息日真理は第七日安息日であったが、それは終末時代の安息日真理を象徴しており、それは反駁できないもので、1863年の反逆においてラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチズムが最初に拒んだ教義である。その教義はウィリアム・ミラーによって最初に見いだされた基礎的真理であり、エレミヤの「古い道」によって表される、名目上のアドベンチストが歩むことを拒むアドベンチズムの基礎的真理を代表している。その安息日真理とは、レビ記二十六章の「七つの時」である。

フィラデルフィアとスミルナから成る真のプロテスタントの系統は、ユダに象徴される者たちによって裏切られる。ユダはイエスを三度裏切る契約を結び、それによって、十字架に先立ち、そして十字架で完結する段階的な裏切りが示されている。ダニエル書11章16節は日曜法を表しており、それは十字架によって予表されている。したがって、16節の日曜法（これは41節の日曜法でもある）に至るまでの諸節において、終末の聖徒たちには三段階の裏切りがもたらされる。その裏切りは、主が終わりの時の旗印を再び集めておられる期間に起こる。

その日、エッサイの根が立って民のための旗となり、異邦人はそれを求め、その安息は栄光に輝く。その日、主はふたたび御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、また海の島々から、残されているご自分の民の残りを取り戻される。主は諸国のために旗を掲げ、イスラエルの追いやられた者を集め、地の四方からユダの散らされた者たちを寄せ集められる。エフライムのねたみは去り、ユダの敵は断たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダはエフライムを悩ますことはない。彼らは西の方のペリシテ人の肩に飛びかかり、ともに東の者たちをかすめ取り、エドムとモアブに手を伸ばし、アンモンの子らは彼らに従う。イザヤ書 11:10-14.

イザヤは、第10節の「その日」という表現によって、この箇所を歴史的背景を示している。したがって、その「日」は、第10節に先立つ諸節の中で特定されている。この預言的叙述を、「その日」がいつかを特定できる手がかりまで遡っていくと、10章1節に行き着く。

不義の法令を定め、自ら定めた圧制を書きしるす者たちは、わざわざいだ。イザヤ書 10:1

ホワイト姉妹は、この聖句の「不義な法令」を、まもなく施行される日曜法であると特定している。

デューラの平野に金の像が立てられたように、偶像の安息日が打ち立てられた。そして、バビロンの王ネブカドネツアルが、この像にひれ伏して拝まない者は皆、死刑に処せられるべきだという勅令を出したように、同じく、日曜の制度を敬わない者は皆、投獄および死刑で罰せられるという布告が出されるであろう。こうして主の安息日は踏みまじられる。しかし主は宣言された。「不正な勅令を定め、自ら定めた圧制を書き記す者には災いだ」[イザヤ 10:1]. [ゼパニヤ 1:14-18] 原稿集 第14巻、92頁。

主が再び御自分の民を集められるという文脈は、迫り来る日曜法の危機の歴史の中に位置づけられている。というのも、イザヤ書10章12節でイザヤは、不義の法令、すなわち日曜法において主が執行の裁きを行われる前に、主が御自分の民の間での働きを終えられることを語っているからである。

それゆえ、主がシオンの山とエルサレムにおいてそのすべてのわざを成し遂げられるとき、わたしはアッシリアの王の高ぶる心の実と、その高慢な目の栄えを罰する。イザヤ書 10:12

「シオンとエルサレムに対する働き」で、主が日曜法において法王権への懲罰が始まる前に「行う」ものは、十四万四千人の封印である。エゼキエル書第9章では、書記の墨壺を携えた人がエルサレムを巡り、「この地および教会で行われた忌むべきことのために嘆き叫ぶ者たち」に印を付ける。その働きには、主がイスラエルの散らされた者たちを再び集める過程が含まれている。彼は彼らを地の四隅から集めるが、その「地の四隅」は八つの地理的区域で表されている。八は獣の像の試練の過程を象徴する数であり、したがって、旗印となる者たちの最終的な集めが、地上で獣の像の試練が遂行されている期間に起こることが示されている。

「エフライムがユダをねたまず、ユダがエフライムを悩ませない」ことで表される一致は、ユダの敵対者たちが断ち切られるときに起こる。預言的には、ユダ、サタンの会堂、あざける者の集会、ミラーライト史のプロテスタント、あるいはキリストの時代のユダヤ人によって表される、かつての契約の民は、最初の失望において「断ち切られる」。エレミヤがまさにその歴史を表すとき、彼は、彼自身は二度とあざける者の集会に戻ることはできないが、彼らが悔い改めることを選ぶなら、彼らは彼のもとに戻ることができるかと教えられた。

2020年7月18日から日曜法に至るまで、主は終末の民を二度目に集められる。主は、ユダとエルサレムに関する御業全体を仕上げておられる期間に、世界中から彼らを集められる。その封印の時に、神の終末の民は目立たない存在であるが、それでもなお、彼らの働きに反対する三者連合に直面するだろう。

カトリックは三者連合の獣であり、ホワイト姉妹が名目上の教会と特定する一群は、その娘に当たる。彼らは偽預言者を表している。ユダに象徴される名目上のラオデキアのアドベンチストは、この表現において竜である。1863年の反逆は、最初のカデシュにおける古代イスラエルの反逆によって予表された。そこでは、彼らはヨシュアとカレブのメッセージを拒み、エジプトに戻ることを選んだ。エジプトは竜の象徴である。

人の子よ、エジプトの王ファラオに向かって顔を向け、彼とエジプト全土に対して預言せよ。言え、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはおまえに敵対する、エジプトの王ファラオよ。おまえは、その川々のただ中に横たわる大いなる竜で、『わたしの川はわたしのもの、わたしは自分のためにそれを造った』と言った者だ。エゼキエル書 29:2、3。

カデシュでの反逆は、エジプトから導き出された選民の拒絶と死をもたらした試練の過程における第十の試練を表しており、また、1844年10月22日にフィラデルフィア的ミラー一派アドベンチズムに課され、1863年の反逆で終結した試練の過程の最終試練を予表していた。古代イスラエルの歴史のまさに終わりに、ユダヤ人は「彼を除けよ、除けよ、十字架につけよ」と叫んだ。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王をわたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「我々にはカエサルのほかには王はない」。最初の反逆と最後の反逆において、旧契約の民は、竜の象徴（エジプトと異教ローマ）を自分たちの王として選んだ。

2020年7月18日、「ユダの敵」は「断ち切られ」、十四万四千の神殿が建てられた。残っていたのは、契約の使者がご自分の神殿に突然来られるに先立って、その神殿が清め

られることだけであった。

ミラー派の歴史における神殿は、1798年から1844年までの46年間で建てられた。1844年4月19日の第一の失望において、プロテスタントは断ち切れ、サタンの会堂、嘲る者の集会、ローマの娘の一部となった。その時から1844年10月22日まで、忠実な者たちがキリストに従って至聖所に入るに先立ち、キリストがご自分の神性を彼らの人性に結び合わせる働きを成就するための清めの過程が行われた。

真のプロテスタントの角の歴史は、不義の布告の直前に、神がバビロンからご自分のほかの群れを呼び出すための旗印となるべく二度目に集められるのであるが、それは、背教的な共和主義の角とプロテスタントの角が結びつき、霊的な姦淫を犯して一体、すなわち一つの神殿となり、これが獣の像である、その同じ時期に起こる。神の神殿は同時にキリストのかたちを形づくっている。

次回の記事でこの研究を続けます。

主からエレミヤに臨んだ言葉はこうである。「主の家の門に立ち、そこでこの言葉を宣べて言え。『主を礼拝するためにこれらの門から入るユダのすべての者よ、主の言葉を聞け。万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。あなたがたの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの所に住ませる。「主の宮だ、主の宮だ、主の宮だ」と言って、偽りの言葉に頼るな。もしあなたがたがまことに自分の道と行いを正し、人とその隣人との間にまことに公正な裁きを行い、寄留者、みなしご、やもめを虐げず、この所で罪なき血を流さず、自分の害となる他の神々に従って歩むことをしないなら、そのとき、わたしは、あなたがたの先祖に与えたこの地、この所に、あなたがたをとこしえに住ませる。見よ、あなたがたは益にならない偽りの言葉に頼っている。あなたがたは盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、あなたがたの知らない他の神々に従って歩き、それから、わたしの名で呼ばれているこの家に来てわたしの前に立ち、「これらの忌むべきことをみな行うために、わたしたちは救い出されている」と言うのか。わたしの名で呼ばれているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣になってしまったのか。見よ、わたし自身がそれを見た、と主は言われる。』」

しかし今、あなたがたは、最初にわたしの名を置いたシロにあったわたしの場所へ行き、わたしの民イスラエルの悪のゆえに、わたしがそれにしたことを見よ。そして今、主は言われる。あなたがたがこれらすべてのわざを行ったので、わたしは朝早くからあなたがたに語りかけて語ったが、あなたがたは聞かなかった。わたしがあなたがたを呼んだが、あなたがたは答えなかった。それゆえ、わたしの名で呼ばれているこの家、あなたがたが頼みとしているこの家と、わたしがあなたがたとあなたがたの先祖に与えたこの場所に対し、わたしはシロにしたようにする。そして、あなたがたのすべての兄弟、すなわちエフライムの全子孫を投げ捨てたように、わたしはあなたがたをわたしの前から投げ捨てる。それゆえ、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びや祈りをささげてはならない。わたしに取りなしてはならない。わたしはあなたの声を聞かないからだ。

ユダの町々やエルサレムの通りで彼らが何をしているのか、あなたは見ないのか。
エレミヤ書 7:1-17.